

を持つのか、又そこに我が国の如何なる歴史的背景が有るかに附いて想い輸さなければ、画竜点睛を欠く事になるであろう。何故ならば、史料批判 (Quellenkritik) の方法と歴史主義 (Historicismus) の思想とに拠って近代歴史学を確立したレーオポルト・フォン・ランケ (Leopold von Ranke 1795-1886) の謂うが如く、歴史は個のみに目を遣れば不分明となり、全体性のみに目を遣れば冷やか (kühl) となるからである。

日本工学校が創設された昭和十二年は日中戦争 (当時の表現では「日支事変」) が勃発した年であり、「理学科」新設が実現された昭和十五年はそれが拡大し、しかも太平洋戦争勃発の前年であり、その為に昭和十二年は国家財政に於ける軍事費が急増して約三、一九三、九八九、〇〇〇円 (国家財政中六九・五%) に、昭和十五年は約七、九六三、四九〇、〇〇〇円 (国家財政中七二・五%) になっていく (帝国書院 統計・ニュース 統計資料 歴史統計 軍事費 第I期〜昭和20年) に依る)。その結果、軍需産業が活況を呈し、高等教育機関に於ける「国防科学」研究の充実や「航空科、軍需関係講座」の「新增設」 (昭和十一年十二月二十四日日付『朝日新聞』夕刊) となり、更に「軍需産業に繋がる理工科系統」では「萬歳の春」となり、「各大学の工學部では應用科学、機械、電気、造兵、火薬、船舶等のいづれの學科とも三倍から七、八倍」

「採鉱冶金の如きは十倍近い」「求人申込」がある (昭和十四年十二月六日日付『朝日新聞』夕刊) 状況が現出した。

理系学部も充実した総合大学へ大成していく近畿大学の歴史の中で、昭和十二年の日本工学校創設はその第一歩を、更に同十四年日本工業學校の創設・同十五年の理学科新設は大きな第二歩を、昭和十八年の大阪理工科大学の設置はその第三歩を成すものであると想われる。今回取り上げた昭和十五年の理学科新設が近畿大学の斯かる歴史の大きな第二歩であるという意味は、それ迄の法学・商学の文系教育を中心にしたコンパクトな専門學校という性格の前身校が、理系教育も包含して質的变化を遂げ、しかも一挙に規模を拡大するという新紀元 (Epöche) を画する事になったからである。

追記

本稿では近畿大学関係者のみは「先生」としたが、それ以外の人士については敬称を省いているので、この点は諒とされたい。原典尊重の観点から引用史料の表現・漢字は、原則として、そのままにしている。

『朝日新聞』及び『大阪朝日新聞』は朝日新聞記事データベース「聞蔵II ビジュアル」で閲覧して利用した。
(近畿大学名誉教授
建学史料室特別研究員 荒木 康彦)

学外訪問調査

信州大学大学史資料センターでの聞き取り調査報告

各地のアーカイヴズ訪問調査の一環として、令和元年 (二〇一九年) 十一月五日に国立大学法人信州大学の大学史資料センター (長野県松本市) で見学と聞き取りの調査を行った。調査には大学史資料センター長・

人文学部教授の渡邊匡一氏と同センター特任教授の福島正樹氏にご協力いただいた。調査は、本学建学史料室の富岡勝研究員が担当した。

信州大学は、昭和二十四年 (一九四九年) に長野県下の松本医学専門学校、松本医科大学、松本高等学校、長野師範学校、長野青年師範学校、長野工業専門学校、長野県立農林専門学校、上田繊維専門学校の前身校を包括・併合して設置され、令和元年に創立七〇周年を迎えた。この創立七〇周年への取り組みを契機として、信州大学の歴史に関する史資料の体系的な収集・整理・保存・公開・展示などを実施する組織として、平成二十九年

(二〇一七年) 四月に大学史資料センターが設立されたという。

展示「信州大学誕生」

ちょうど同センターの第二回企画展として「信州大学誕生 残された文書が語る誕生の舞台裏」が



第2回 信州大学大学史資料センター企画展
70 信州大学誕生
残された文書が語る誕生の舞台裏
2019年10月10日 - 12月18日 / 2020年3月18日 - 5月11日
信州大学中央図書館 1階展示コーナー
TEL: 0263-37-3531 / FAX: 0263-37-3532 / E-mail: archives@shinshu-u.ac.jp



「信州大学誕生」のポスターと展示風景

開催されていたので、福島氏に案内していただきながら、まず、この展示を見学した。

「大学内各所に残された文書や資料を通して、開学に至るまでの経緯や関係者の様々な思いを探り、大学誕生の舞台裏を垣間見たいと思います。」(信州大学大学史資料センターホームページ内の文章より)という趣旨の展示であった。戦後、新制大学が誕生する際、当初は前身諸校が単独大学としての設立認可を目指す動きもあったが、長野県高専校長会議などを通じて総合大学としての設置構想が進められていった様子や、設置認可申請をめぐる文部省とのやりとり、関係者の苦心などが史資料を通して具体的に紹介されていて、興味深く見学した。この展示は、教職員・学生が多く利用する信州大学附属図書館の中央図書館(以下、中央図書館と略)一階にある展示コーナー

で開催されていた。また、令和元年十月十日〜十二月十八日と、令和二年三月十八日〜五月十一日の二期にわたって開催され、展示開催にあわせて、図書館内のスペースで昼休みに「ギャラリートーク」や「知の森昼時セミナー」の開催が用意され、その旨が同センターのホームページを通じて周知されていた。展示に合わせて多くの人の目に留まりやすい場所で展示を開催するとともに、展示に合わせてギャラリートークなどの企画を実施し、インターネットも利用して幅広く周知している点は本学にとっても参考になるものであった。

大学創立七〇周年を契機に設置中央図書館での展示見学のあと、大学史資料センター内で渡邊氏と福島氏から、同センターの設立経緯、組織、活動内容などについて聴

取した。その内容は、簡単に述べるのと、周年行事を契機として設立されて主に令和元年の周年行事に取り組んでいるが、周年行事以後の活動発展にむけた準備も積極的に進めている、ということであった。

大学史資料センターは、平成二十八年(二〇一六年度)の設立準備を経て、平成二十九年四月に、信州大学附属図書館内のもとでの組織として設立されている。

同年三月十七日に制定された「信州大学大学史資料センター規程」で、同センターの目的は、「信州大学の歴史に関する資料(以下「歴史資料」という。)を収集、整理及び構築し、公開、展示等の業務を推進することを目的とする」と定められている。

業務内容は、「(一) 歴史資料の収集・整理・保存に関すること。(二)

歴史資料アーカイブ構築に関すること。(三) 歴史資料の公開、展示等に関すること。(四) その他センターに必要な業務に関すること。」となっている。

組織構成は、大学史資料センター(附属図書館長が兼任)、特任教員、その他必要な職員で構成されている。例えば平成三十年(二〇一八年度)の組織構成は、センター長一名、特任教授一名、技術補佐員三名、事務補佐員一名となっている。

七〇周年記念を中心とした

取り組み

同センターの具体的な活動内容についても拝聴した。

令和元年度(二〇一九年度)までは、創立七〇周年記念行事として、展示やイベントの主催や開催協力に力を入れてきたとのことであった。そのうちの主要なものとして、次のようなものがある(平成二十九年八月に開設された同センターのホームページで逐次告知)。

平成三十年度

第一回企画展「信州大学今昔(いまむかし)」(信州大学創立七〇周年・旧制松本高等学校一〇〇周年記念事業の一環として、信州大学中央図書館一階展示コーナーで開催)

第一回企画展ギャラリートーク(信州大学中央図書館一階展示



「信州大学大学史資料センター」のポスター



「信州大学歴史探訪マップ 1873-2019」より

コーナーで開催)

「知の森昼どきセミナー」でのセミナー開催①「信州大学誕生」講師・福島正樹氏、②「松高生の青春日記」(講師・渡邊匡一氏)(信州大学中央図書館一階自由学習スペースで開催)

オープンキャンパス企画展示「信州大学今昔(いまむかし)」(信州大学中央図書館一階展示コーナーで開催)

連携企画展「松高人名録(その一)」(旧制高等学校記念館、信州大学日本文学分野・信州大学史資料センターの連携企画) 旧制高等学校記念館一階ギャラリーで開催

信州大学創立七〇周年・旧制松本高等学校一〇〇周年記念事業ブレ・シンポジウム「赤レンガでつなぐとき、まち、ひと」(信毎メディアアガーデン1階ホールで開催)

令和元年度(十一月五日まで)

周年記念企画展示「信州大学今昔(いまむかし)」(信州大学の沿革および各学部の系譜) まつもと市民芸術館一階・二階で開催

ムービー「信州大学のあゆみ」上映(まつもと市民芸術館二階シアターパークで開催)

スライドショー「松高人名録(その一)」・「思誠寮生の青春日記」上映

(まつもと市民芸術館二階シアターパークで開催)

「信州大学歴史探訪マップ」発行(信州大学創立七〇周年・旧制松本高等学校一〇〇周年記念事業。大学史資料センター監修)

スライドショー「信州大学歴史探訪」キャンペーンに刻まれた記憶」のWeb公開

スライドショー「松高人名録(その一)」のWeb公開

スライドショー「思誠寮生の青春日記」のWeb公開

映像「信州大学のあゆみ」信州の高等教育・黎明期から大学誕生まで」のWeb公開(信州大学創立七〇周年・旧制松本高等学校一〇〇周年記念事業。大学史資料センター監修)

映像「池上彰氏トークセッション『信州の高等教育黎明期』」のWeb公開(信州大学創立七〇周年記念式典第二部の映像。出演者はジャーナリスト・信州大学経済学部特任教授池上彰氏、信州大学副学長・附属図書館長・大学史資料センター長渡邊匡一氏、信州大

学広報スタッフ会議外部広報アドバイザー川崎紀夫氏)

第二回企画展「信州大学誕生」(信州大学創立七〇周年・旧制松本高等学校一〇〇周年記念事業の一環として、信州大学中央図書館一階展示コーナーで開催)

こうした展示や行事に力を入れるとともに、卒業生や地域の方々に歴史資料の寄贈を呼びかけ、四箇所のキャンパス(松本キャンパス、上田キャンパス、長野キャンパス、伊那キャンパス)に所在する歴史資料の状況把握と整理・保存活動を実施するとともに、県内の教育関連機関(例えば旧制高等学校記念館など)と連携してデジタルアーカイブスの構築などにも取り組んでいることであつた。

創立記念事業以降の構想

七〇周年記念行事終了後の同センターの活動について伺ったところ、今後は信州大学に関する歴史資料を学内外から収集して整理・保存し、デジタルアーカイブスを構築して公開するなど、アーカイブスとしての活動に本格的に取り組んでいきたいとのことであつた。すでに学内に検討部会が設けられ、将来の一〇〇年史編纂も視野にいたれた中、長期計画の構築も検討されているという。

今回、信州大学史資料セン

ターを訪問し、周年事業と連動した大学アーカイブスの具体的な活動例に触れることができた。それとともに、周年事業を契機としながらも中長期的な観点をもって大学の歴史に関する史資料の整理・保存・公開に取り組むための具体的な準備の必要性をあらためて認識することができた。

渡邊匡一センター長、福島正樹特任教授をはじめとした同センターの皆様心から感謝申し上げます。

(追記) 訪問時に伺った同センターの将来構想が、令和元年十一月十八日、学術情報・図書館委員会大学史資料センター検討部会『大学史資料センター検討部会報告書』信州大学大学史資料センターの活動評価及び今後の展開について』としてまとめられ、信州大学学術情報オンラインシステムで公開されている。そして同年十一月二十日には、同センターホームページ内で、渡邊センター長名で、従来の活動に加えて「新たなミッションとして『信州大学一〇〇年史の編纂』を行うこと、『自校史教育』の更なる充実を図ることが決定されました」と報告されている。引用部の表現・漢字は原典尊重の観点から、そのままにしている。

(教職教育部教授
建学史料室研究員 富岡 勝)